

静岡大学 浜松キャンパス

100 年 史



国立大学法人 静岡大学

静岡大学
浜松キャンパス

100
年 史

静岡大学浜松キャンパス100周年に寄せて



学長 日詰 一幸

静岡大学浜松キャンパス 100 周年にあたり、記念誌が発刊されましたことを心よりお喜び申し上げます。1922(大正11)年に静岡大学工学部の前身である浜松高等工業学校が設立されてからちょうど 100 年が経過しました。浜松高等工業学校は戦時中の 1944(昭和19)年に浜松工業専門学校に名称を変えましたが、終戦後の 1949(昭和24)年に現在の浜松キャンパスの地で新制静岡大学の設立とともに工学部が誕生して、新たな歴史を歩み始めました。そして、1995(平成7)

年には新たに情報学部が設立され、現在に至っています。

新制静岡大学は 1949(昭和24)年の設立ですので、静岡大学でこれまで刊行された「年史」はすべて戦後の記述がほとんどで、それ以前の歴史を紐解くことは容易ではありませんでした。そのような中、浜松キャンパス 100 周年記念事業の一環として発刊されたこの記念誌は、浜松キャンパスのこれまでの歩みを記した実に貴重な記録であると言えます。私も刊行前に記念誌の原稿の一部を読ませていただきましたが、浜松高等工業学校の開校から浜松工業専門学校へ、そして戦後の新制静岡大学の誕生からその後の発展の歩みをよく理解することができました。

浜松高等工業学校の初代校長、関口壮吉先生の教育方針である「自由啓発」という言葉は、現在の静岡大学の理念である「自由啓発、未来創成」のもとになったもので、我々は今でも関口先生の思いを引き継いでいると言えます。さらに、関口先生は「自由啓発」という教育方針のもとで知識の習得だけに偏ることなく、「徳性の涵養」も重要であるということで、体育の重視や自由学習の導入など、当時としては実にユニークな教育を施されました。そして、浜松高等工業学校の初期の頃は制服もなかったようですが、その後制服と制帽を学生から募集して決めたというエピソードを知るとともに、「自由教育主義」のもと、学生の自主性を重んじ出欠をとらず、成績を評価するための試験も行わなかったという逸話も記念誌から知ることができました。現在の静岡大学の自由を重んじる伝統は、まさにその当時からのものであったと言えます。

また、浜松キャンパスの電子工学研究所は 1965(昭和40)年に設置されましたが、その背後には高柳健次郎先生の「テレビジョン開発」をはじめとする研究の成果が大きな役割を果たしていたこと、さらに現在の優れた研究成果の多くも浜松高等工業学校からの伝統を引き継いでいることを理解することができます。

この記念誌は、戦前における浜松高等工業学校や浜松工業専門学校、そして戦後の新制静岡大学という流れを 100 年という時間軸の中で、その教育研究活動の変遷を實に見事に描いています。当時の写真も多く、さらにコラムも所々に入れられていて、最後まで飽きることなく読み通すことができるように工夫されています。

私は今、この記念誌を手にし、これまで史・資料の収集からその編纂までその膨大な作業を担い、刊行まで導いてくださった、記念誌出版事業部会長の笹原恵先生、副部会長の喜多隆介先生、さらには記念誌全体の監修をお引き受けくださった荒川章二先生、そしてこの記念誌の執筆をご担当くださいましたすべての皆様に心よりお礼を申し上げます。この記念誌が一人でも多くの方々にお読みいただき、静岡大学浜松キャンパスの栄光の歴史を知っていただくことを心より祈念致します。

浜松キャンパス100周年に寄せて



元学長 伊東 幸宏

静岡大学浜松キャンパスが100周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。静岡大学は、浜松に設置された浜松高等工業学校から名称変更した浜松工業専門学校、磐田に静岡県立農林専門学校として設置された後に改編された県立農科大学、静岡に設置された旧制静岡高等学校、および静岡や浜松に設置された師範学校を母体とする総合大学として設置され、戦後の静岡県の高等教育の中核として多くの人材を育成しつつ先進的な研究成果をあげてきております。ちなみに今年は浜松キャンパス100周年であるとともに旧制静岡高等学校設置から数えて100周年にも当たります。

当初は静岡、磐田、浜松の3キャンパスでしたが、1973(昭和48)年に磐田の農学部が静岡に移転し、以来静岡と浜松の2キャンパスとなりました。浜松キャンパスには、工学部をはじめ、1976(昭和51)年に新制大学初の附置研究所として発足した電子工学研究所、1995(平成7)年に教養部廃止に伴い情報を学ぶ学部として国立大学で最初に設置された文工融合の情報学部があります。

2つのキャンパスは、それぞれが拠点を置く都市である駿河国、遠江国から引き継いでいる異なった文化的背景を持っており、静岡キャンパスがアカデミア色の強い学部が多いのに対して浜松キャンパスは実学志向が強いなど、異なった個性を持っています。それが軋轢を生むこともありますが、それぞれが組み合わせられ、補完しあい、6学部2研究所を擁する総合大学としての静岡大学を構成しています。それぞれのキャンパスが個性を伸ばし、どこか尖がった強みを磨き、研ぎ澄ましていくことが期待されています。

浜松キャンパスの100周年は誠に喜ばしいことですが、この間、新制学制のスタート、工業短期大学部の廃止、教養部解体、浜松キャンパスでの4年一貫教育の実現、大学法人化など様々な社会の変化とそれに伴う大学への要求の変化に対応しつつ、静岡大学としての歴史を繋ぐべく身を切るような意思決定を重ねてきた結果が今の静岡大学であると思います。今後の大学を考えると、少子化問題、大学の社会的役割の変化、大学のガバナンスの在り方や大学財政の問題など、多くの課題が見えてきています。浜松キャンパス100周年、旧制静岡高等学校設置からの100周年を一つのマイルストーンとし、今後もキャンパスの利害を超越して静岡大学の発展を共通の願いとして、両キャンパスが、そして静岡市と浜松市が、静岡県が、更には日本が、人類が発展して行くことを祈念しております。

浜松キャンパス設立100周年に寄せて ～次の100年輝くために(Next Century)～



理事／副学長 川田 善正

浜松キャンパス100周年誠におめでとうございます。100年という記念すべき節目の年に、理事として記念誌に寄稿できることは大変光栄であり嬉しく思います。

1922(大正11)年に浜松高等工業学校の設立が公布されてから現在までの100年は、浜松キャンパスにとって、輝かしいものだったと思います。1926(大正15)年の高柳先生のテレビの発明に始まり、NHKのテレビ番組「プロジェクトX」等で数多くの先輩方の産業界での活躍が紹介されています。例えば、エンジンの開発、クォーツ時計の開発、カミオカンデ、犬型ロボットの開発、など多くの社会的なインパクトのある研究開発において主導的な役割を果たしたことが紹介されています。また、浜松市を中心に地域との連携を積極的に進めることにより、地域の産業界・経済界の発展に貢献することにより、地元から信頼される知の拠点として信頼と実績を積み重ねてきたものと思います。多くの卒業生が浜松キャンパスを巣立ち、全国・世界に羽ばたき、誇りを持って活躍されておられると思います。

この間、大学の改組も進められてきました。1949(昭和24)年に静岡大学工学部が設立されてから、1952(昭和27)年に電子工学研究所、1995(平成7)年に情報学部、2006(平成18)年に創造科学技術大学院、2018(平成30)年には浜松医科大学との共同教育課程(博士課程)である「光医工学共同専攻」が設置され、多様な学生教育のための環境が整ってきています。さらに浜松キャンパスの建物等の設備整備も進められ、現在は非常に綺麗なキャンパスとなっています。光創起イノベーション研究拠点棟の竣工、事務棟および図書館の建て替え(S-Port)、工学部の各建物の改装などに続き、電子工学研究所の建て替えも終了しました。グラウンドも人工芝として整備され、今後、情報学部棟の改装も予定されております。より一層、学生および教職員の皆様の教育研究に集中できる「知の拠点・地の拠点」としての体制が整ってきていると思います。

今回の浜松キャンパス設立100周年にあたっては、これまでの実績と成果を基礎として引き継ぎ、より発展させるための契機とすることが重要であると思います。浜松キャンパスに国内はもとより世界から多くの多様な学生、研究者・技術者が集い、浜松キャンパスで学び、新しいイノベーションを創出することによって、人材及び成果を浜松から世界に輩出・発信する中心拠点となることを期待しております。100周年記念の事業が、「次の100年輝く(Next Century)」ための礎となることを願っております。浜松キャンパスの皆さんが、協力・連携して輝かしい未来を切り拓かれることを祈念しております。

浜松キャンパス100周年に寄せて



浜松キャンパス100周年記念事業推進後援会会長
元セイコーエプソン株式会社代表取締役社長

38D 草間 三郎

2022年9月24日浜松キャンパス 100周年記念式典が盛大に挙行されました。学長挨拶の後に、卒業生を代表して挨拶の機会をいただき感謝しています。

1922年浜松高等工業学校が創立され、1949年新制静岡大学工学部が設置され、1995年情報学部が設立されて今日の浜松キャンパスとなりました。この間に多くの関係者のご努力により今日の隆盛がもたらされたことに心から感謝申し上げます。

科学立国日本と標榜しながら近年の衰退ぶりは眼を覆いたくなる程です。論文数、特許出願数、博士号取得数、海外留学生数など、どれをとっても下降しており憂慮に耐えません。しかしここに来てやっと国力回復のために学術研究の重要性が叫ばれ、大学への大型資金投入の動きが始まりました。このチャンスを見逃すことなく、浜松キャンパスがより充実して発展していくことを願っています。

この寄稿文を書いている10月5日の新聞には、私が「100周年記念事業だより」第2号に記述した量子力学の「量子のもつれ」を解明した3人の学者が2022年ノーベル物理学賞を受賞された記事が掲載されています。私が在籍していた1960～1963年頃に研究が進み学界が湧いていました。物理担任の鍋島先生から教えられ、シュレーディンガーの猫に興味をひかれて量子力学にかぶれていたものです。

これからは大学の特徴を鮮明にして行かないと生き残れない。幸い浜松キャンパスの光工学フォトンエンジニアリングは日本の最先端の水準にあり、多大な実績を挙げています。関連企業も育ち、また増えてきています。上記した量子関連で光量子コンピュータが脚光をあびていて、日本では東大、NTT が研究を始めただけの新しい分野で浜松キャンパスに適した分野であり、研究をスタートしていただきたいと思います。最近では医学との連携プロジェクトも進んでいます。医学－工学－情報学の学際領域には人類に大きく貢献できるテーマが山積しています。既に幾つかの共同研究プロジェクトがあります。これを加速させるために、浜松キャンパスは浜松医科大学との統合を早期に成し遂げ、新しい大学法人を誕生させていただく事を強く要請致します。

さて最後になりますが、浜松キャンパス 100周年記念募金事業を5年前からスタートしています。目標金額10億円を集めて3分野に資することになっていますが、関係者の皆様、外部企業の絶大なご支援を賜り、目標金額には到っていませんがもうひと息の金額まで積み上がりました。募金活動は2023年3月まで続きますので、特に卒業生の皆さんに支援をお願いします。募金活動に精力的に取り組んで頂いている関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

浜松キャンパスの更なる躍進を心から願っています。

浜松キャンパス100周年を迎えて



浜松キャンパス100周年記念事業実行委員会委員長・工学部長 喜多 隆介

毎年春を迎えると浜松キャンパス正門の関口バラが見事に咲き誇り、道ゆく人々の目を楽しませている。工学部のルーツである浜松高等工業学校の初代関口壮吉校長は、特に自由な気風を好み、斬新な考え方で学校の塀の代りにこの白いバラを植えられた。工学部の「自由啓発」という理念は、関口先生が掲げた「仁愛を基礎にした自由啓発主義」に基づいたものである。学生や教員の分け隔てなく、自由な議論を通して新しいものを創り出していくというこの気風は、今も浜松キャンパスに受け継がれ、この1世紀の間に多くの教員や卒業生によって、輝かしい業績が次々と生み出されてきた。

そのルーツは何と言っても世界初の電子式テレビジョンを開発した“日本のテレビの父”とも呼ばれる高柳健次郎先生にある。当時世界的には無線遠視法というテレビのコンセプトが出てきたばかりで、機械式テレビの開発がなされていた時代であった。この時に、高柳先生は独自に改良したブラウン管を用いて1926年世界で初めて画像の電送・受信に成功したのである(有名なイの字)。NHK ラジオ局の開局が1925年であることを考えると、先生のご研究は時代を大きく先取りした画期的な成果と言える。

その後、先生のご研究は高柳先生の門下生による国産初のテレビ開発につながり、次々と世界を変える革新的な技術が生み出された。ベル研究所でも成し遂げられなかった世界初のクォーツ腕時計の開発、日本初優勝のF1エンジンの設計開発、世界一厳しい米国の排出ガス規制法を初めてクリアした低公害エンジンCVCCの開発、初の国産H-II ロケットの姿勢制御装置の開発、日本初のビデオ世界規格VHSの開発、ノーベル賞受賞につながった世界最大の光電子増倍管開発、最近では世界初の消えるインキ・フリクションボールペンの発明等々枚挙にいとまがない。工学部の卒業生は多くの革新的技術に挑戦し、技術者として日本の「ものづくり」産業の発展に大きく貢献したといっても過言ではない。また、高柳先生をルーツとする光技術の伝統はTOKYO2020オリンピック・パラリンピックで使われた8K スーパーイメージセンサーの開発など、世界最高のイメージング技術開発に受け継がれている。

浜松キャンパスは、教育や研究を通して、地域や企業の皆様にとって「真に頼りになる大学」として、今後存在感を高めながら大きく発展していくという大きな使命を持っている。これまで培った伝統を基に、関口バラ同様浜松キャンパスが大きな花を咲かせ、次の100年も輝いていくことを期待している。

浜松キャンパス100周年を迎えて



浜松キャンパス100周年記念誌出版事業部会部会長・情報学部長 笹原 恵

温故知新とはよく言ったもので、浜松キャンパスの歴史をひも解き、改めて、この100年の礎を築いてきた先達の努力のうえに、浜松キャンパスが成立していることを実感した。

浜松の地に「高等工業学校」を設立しようと尽力した人々、関口壮吉初代校長をはじめ、大正期に浜松高等工業学校の設立にかかわり自由な気風の中で教育研究体制を作り上げた諸先輩がいなかったら、今日の浜松キャンパスはなかった。そして、テレビジョン開発という志をもち、浜松高等工業学校に着任した高柳健次郎先生は我が国におけるテレビジョン放送の実現を導くとともに、本学や浜松の地に、日本でもトップレベルでの実績を誇る研究の基盤を残した。

浜松高等工業学校や浜松工業専門学校が浜松の地で果たした役割は、技術的なもののみならず文化的な側面も大きい。最先端の技術を身に付けた技術者を輩出することを通して、またさまざまな技術開発により、企業に貢献したことはもとより、最先端の文化をこの地に迎え入れる窓の役割も果たしていた。

浜松工業専門学校時代の「創立25周年記念祭」のプログラムをみると(本誌p.15)、文化講演のために、カントの翻訳でも知られる天野貞祐や武者小路実篤を招き、また東京フィルハーモニーオーケストラの演奏会を開催している。当時の浜松市民が日本でも代表的な哲学者や文学者の言に耳を傾けたことを想像すると現在でもわくわくする。またオーケストラを初めて目の当たりにした子どもたちはさぞかし目を丸くしたことだろう。

戦時下の浜松工業専門学校で教え、学んだ人々のことも忘れることはできない。本誌に特集を組ませていただいたが、航空機科の松尾直衛氏のノートからは、戦時下で真剣に講義に聞き入りノートをとる学徒の姿がありありと浮かび上がってくる。

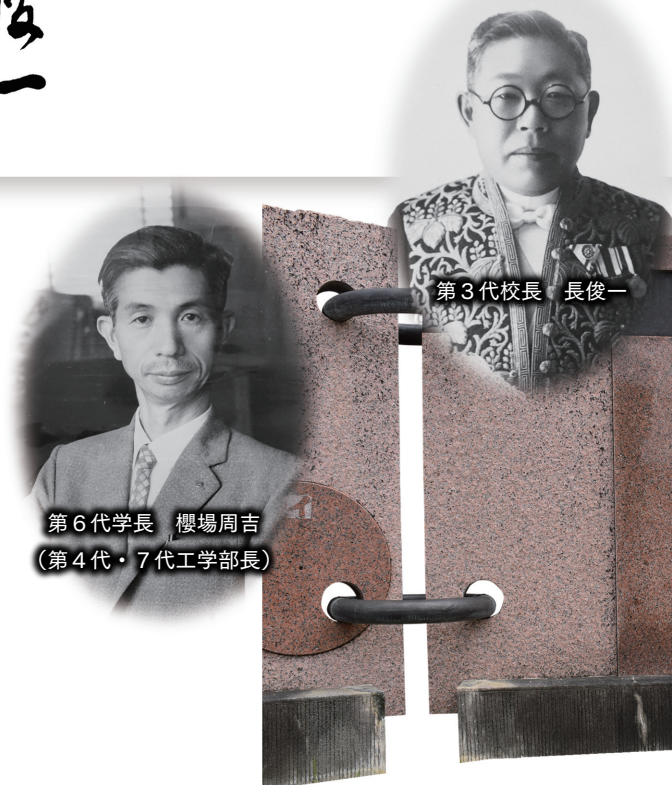
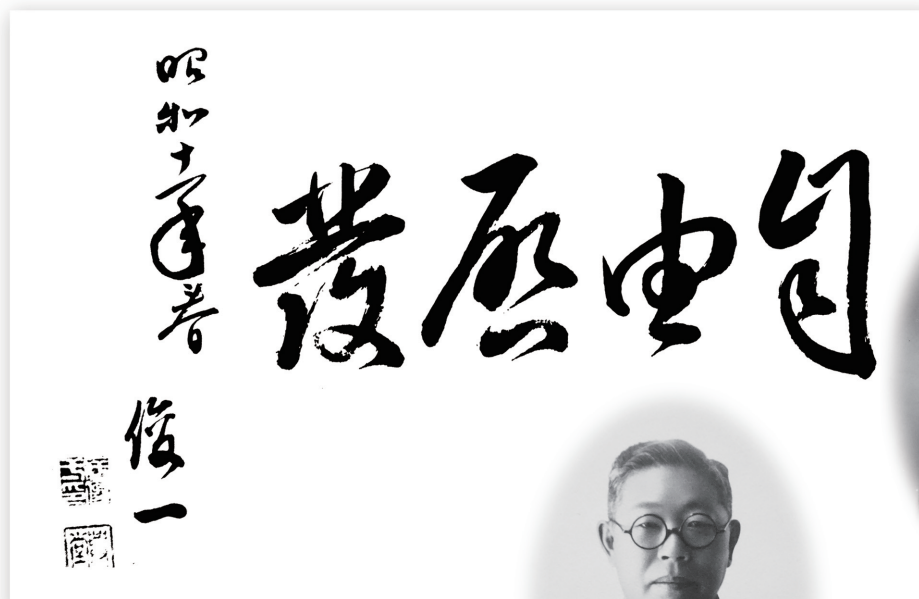
また空襲で焼失したキャンパスを立て直し、新しい日本の復興に向けて、現在の静岡大学の礎を作った人々の努力も決して忘れることはできない。

歴史というものはそういうものであろうが、これらのどれ一つが欠けても、今日の私たちの静岡大学浜松キャンパスはなかった。100年の歴史に思いを馳せ、そのバトンを受け取って、これからの100年を切り開いていくことを肝に銘じ、ともに100年の歴史をかみしめたい。

なお何とか本誌の出版にまでこぎつけることができたのは、ひとえに、情報学部長も務め、日本近代史の専門家である荒川章二先生が監修を引き受けてくださったおかげである。また本誌の執筆に当たっては本学教員OBOGの皆様や現役教員の皆様のお手を煩わせた。校正や編集にあたっては、出版部会の皆様、編集委員の皆様の緻密な作業があり、そして浜松工業会の伊藤正範さんの献身なしには本誌の発行はできなかった。伏して御礼申し上げたい。

受け継がれる「自由啓発」 — 浜松キャンパスの形成から現在へ —

長俊一氏筆「自由啓発」(1936(昭和11)年)



第6代学長 櫻場周吉
(第4代・7代工学部長)



浜松高等工業学校跡地の記念碑(浜松市中区広沢)

「自由啓発」(櫻場周吉筆)

■「碑銘『自由啓発』について」(抜粋)

「自由啓発」という言葉は、浜松高等工業学校の初代校長関口壮吉先生の開学精神として初めて述べられた言葉である。このたび工業会の記念事業の一環として、元の浜松高等工業学校の跡地に記念碑が建設された。この碑は旧地をメモリアルすることと、この地で初めて高柳健次郎先生がテレビジョンの研究を始められ、今日の電子式テレビジョン方式の基礎を完成された由緒を表現したものであった。メモリアルの方には関口先生の「自由啓発」の言葉を残したいとの発想であった。ところが残念なことにこの言葉の先生の書が一片も見付からぬということで、代筆として私のところに書の執筆が廻ってきた。誠に光栄なことでもあるし、引きうけたものの、これまで碑文などで全く筆をとったことのない私には反面頗る困惑したこともあった。

書というのは、その人の個性が表れておれば良いので、誠心を以って書けばよろしいという人もあり、目をつぶってもよい程練習し一気に書けばよいと云われた人もあった。どれも私を励ます誠に至言であるが、それにしても少しは練習をしなければと思い、実業家であり書道を能くする卒業生の齊藤重夫氏(22C-22)を呼んで教えを乞うた。ところがいくら書き続けても自分の満足のゆくようには書けぬものであることをこの年でやっと分かった次第であった。遂には御覧の通りの碑銘となった。

「自由啓発」を関口先生はどういう意味を含めて述べられたのか、この言葉は先生の創作なのか、あるいは古人の誰かが言われたか、記されたものだろうか。恐らく関口校長は学生に、諸君は自由に伸びやかに勉学されよと云われ、教官に対しても、講義は型にはまった講義はするな、自由に教授研究せよと云われたように解釈する。

(櫻場周吉「碑銘『自由啓発』について」初出『佐鳴』第62号 1981年)

浜松高等工業学校 第一期卒業生 (1926年3月)



機械学科



電気学科



応用化学科

